

殴られるのもいいかもしれない。

あの時、ほんの一瞬とはいえ、そんなことを考えてしまったのは永遠の秘密だ。

「あーいてて、あいつら調子に乗りやがって。……大事なスーツが駄目になっちゃまったじゃねエか」

「りゃア買い替えたな。」

態々晴海まで足を伸ばして拵えた折角の一張羅が台無しである。色合いといいさり気無いラインといいお気に入りの一品であったのだが、これはもうどつしたって元には戻らないであろうことは判別がついた。

それでも床に投げっぱなしではいけないので、ひとまず洗濯籠に放り込み、打撲と擦過傷で痛む身体を労わりつつ衣服を賣っていく。骨は一切折れていないし、腹も左程は殴られていない。ただ隠しよつのない顔に数発喰らっ

てしまったことで、この先瘧が消えるまでは外出を控えねばならないのかもしれないということが酷く気にかかる。……悠長に、構えていられなくなるかもしれない。そんな予感があった。

だがしかし、選りにも選つて無骨なまでに武を謳つあの陸軍内部が、海軍大将の任につく人間を呪詛する等と言つ手を使つてくるとは。かつて見知りし場所ではなくなつたといつことであるつか。ここ数年の内に其処まで変貌するには何らかの確たる原因があつたとみて然るべきである。

あの人が謳つた理想を鼻であらしい絶望の淵へと追いやつた陸軍が、呪い等と言つ非現実的な手段を取る程に変貌しまつた何が。

それが何なのかは未だ判明しない。しかし放つておく訳にもいくまい。過去の事とはいえ仮にも自分も関わりのあつた組織である。

何より……あの子が巻き込まれかけている。裏を取る必要があるらう。しかも早急に。

「なのに……いてて、やつちまつたよな俺つては何やつてんだか」

只でさえ目敏いあの子の視線を掻い潜り調査を進めるのは些が骨が折れるといつのに、考え無しな行動をとつてしまつた自分に呆れてしまつがいくら後悔した所で過去には戻れないことは判りきつてゐる。今は怪我の治療に専念すべきである。

衣服を脱ぎ捨て、すっかり埃にまみれた身体を洗淨する為バスルームへと向かう。温めのシャワーを頭からかぶり、排水溝へと流れる血と汚れの二色が混じりあつた水流を目で追いながら考えるのはあの子の事。

吃驚させてしまつた。しかも不用意に。

ヤマガラスの名を出された時点で、彼らの望みが断れぬ類のものであることは判っていた。所詮今の自分は彼らの子飼いとみなされているのだから。そしてまた、真面目なあの子が其れを断らないであらうことも。

なのに。

貴様ら揃いも揃って何をして居ったのか、莫迦者どもが。

苛烈な叱責の言葉が思わず口をついて出そうになる程に瞬間的に怒りが湧き起つた。

足のついた奴らの無能ぶりも無益論腹に据えかねたが、あんないい年をした大人達が寄り集まって企んだ事が、いくら優秀たとはいえ成年も未だ迎えていない年齢であるあの子に全ての危険行為を押し付けて自分達は高みの見物等という愚策ときたものだ。心底腹立たしかった。百歩譲って現状目の当たりになっている火急の事態に対して自らが無能であったとしても、それが免罪符になるとでも思っているのか。そつ思つと止まらなかつた。

「あ~~~~~・・・・・・失敗した・・・」

血を流し、よれよれになって帰社した自分を目にした時の、あの子の顔。

驚愕と、混乱。

悲痛・・・・・・そして、怒り。

思わず膝を突いてしまった自分をすかさず受け止め、あの海軍将校を睨み据えた時の、眼差し。鯉口を切りかけたその白く細い、だが鍛えられた手を、思わず握り締め制止した自分の肩を左腕で抱き締め。奴の申し出に迷つ素

振りを見せながら「こちらへと寄越してきたあの……辛い顔

「あんな顔させるつもりはなかったんだがな」

何とが追いやりその場はしのいだものの……あのよつな顔をさせてしまつたら、最初から抵抗などせず、奴らの要求を受け入れていればよかった。そうすれば今現在、恐らく彼の森深い神社の境内内に於いてヤタガラスの使者から一連の説明を受けているであろうあの子の心労を僅かなりとも軽減させることが出来たであろう。これではより負担をかけたただけではないか。みつともない。

だがしかし。

あれ程までの激情に突き動かされたのは随分と久方振りのことで……止まらなかつたのだ。

きゅ、とコックを締め、滴り落ちる水滴に気をつけながらバスタブの縁に持たれ掛け、タオルを手に取る。打撲に響かないようゆっくりと身体を拭い、髪を拭く。やっと止まった鼻血が再出血しないよう顔をいたわるように拭い、身を起す。下着を身につけ、ひとまずの治療で衣服は却って邪魔であろうから用意していた夜着のローブに身を包む。

救急箱は何処に置いてあつたか。社内の道具配置を思い返しながらバスタームを出た。

オキシフルで傷口を消毒し、打撲痕には湿布薬をあてる、といった簡単な手当で一式が済んでしまえば最早今の自分にできることは何も無く、自室へ戻り衣服を改め、所長用チェアに腰掛けながらほんやりと時計の音を聞く。

今はレコードをかける気にもならない。新聞も手にとつてみたが自は一向に文字を追つてくれなかつた。あれほど好きな珈琲すら口にすると氣も起らなない程。どつやら自分はあの子の身を案じているようだ。何だかんだいつて仲のよい黒猫がついてるのでその酷いことにはならないだろうが、それでも彼は葛葉という組織に属する身、ヤタガラスからかばつてやれない事もあるだろう。判つてはいた事だが改めて、あの子の於かれた境遇が痛ましかつた。……そのような同情など、あの子には無用の長物なのだろうけれど。

幾度目かの嘆息をついた其の時、廊下に在る善のない人の氣配を感じた。……、誰だ。

探偵社の扉には休業中の札をかけてあるし、表には恐らく海軍省からの見張りがついていよう。客が来よう筈はない。

僅かに腰を挙げ、不測の事態に備える。息をつめて廊下の窓硝子を注視した其の時、見違えよう筈のない長身の影が其処に映つた。

……まさか、

がちやり、とノブが回り黒マントをなびかせ其処に姿を現したのは正しく、連れて行かれた筈の葛葉ライドウその人であった。足元にはちゃんと寄り添つように黒猫が立っている。しかし……何処か、おかしい。

こいつ……なんでこんなことになつてんだ

連れて行かれた折とは全く様相の異なる相手を卓然と眺めている自分に構つことなく、少年と黒猫は無言で自分の傍に歩み寄つた。

「……鳴海さん、このような場所にいらして……お体の具合は大丈夫なのですか」

酷い、……腫れてしまっている。

マントの裾からすつと白い手を持ち上げ、頬を包み込むように触れられた感触にはつと我に振り返り言葉を返す。

「真迦……お前、人のこと心配してる場合か、お前の方が死にそんな顔色をしているじゃないか」

奴らに何をされたんだ、お前がこんなにふらふらになるなんて。

「斑駒を受けましたので、このような情けない姿を貴方に晒してしまつことになってしまいました」

申し訳ありません。

「……、そんな事は気にしなくていい。それより斑駒って何だ、」

つまらないことを気に病んで謝罪する。今にも倒れそうな少年の肩を支える。

「斑駒とは……判りやすく言えば我が身を身代わりの人形（ひとがた）に置き換え、ある人にかげられし呪

いを代わりに受けるという秘術のことです。」

今の俺の状態は、つまりそういうことなのです。

「身代わりって、そんなお前、」

「受けねばならないと思いましたが……後悔はしていません」

術者を討てば良いだけです。

しれつとそつ返す少年の言葉を聴きながらちらりと足下の黒猫に視線を向ければ、ふい、と視線を逸らされた

どつちやうもなかったといつてどうなるか。

「……死ぬ一步手前って顔してぞぞ、」

「大丈夫です、確かに今はちょっと辛いけれど」
だから、そんな顔をしないで。

真つ青な顔をしながらも何時もの不敵な笑みを浮かべそう返す少年を見詰め、堪らなくなった。

衝動のままに、これまでで不用意な接触を避け続けてきた少年の身体を抱き締める。打撲痕が悲鳴をあげるが構うほどではない。

突然の抱擁にわたたと慌てる少年を他所に、全身から漲るような澆刺さを感じ取られたかつてとは異なり今にも倒れそうな感触をこの腕にもたらすその身体を構わず抱き締め、肩に顔を埋める。

「な、鳴海さん」

「ライドウ」

真摯な声色にびたり、と少年が其の動きを止めた。

「ライドウ、……こんなくだらないことで死ぬなよ」

じつかとこの身を抱き締めながら呟く彼の身体を、傷に響かないように劣るように抱き締め返す。彼は今、自分が泣きそうな声を出していることに気付いているのだろっか。いや……気付いてはいまい。普段はこのように負の感情を表に出すことを潔しとしない人だからこそ尚のこと、痛ましく感じていました。

此度の一件は間違はなく自分が彼を巻き込んでしまっているのだが、彼は自らが人質となっていてしまっている現状を省みて自らを責めているのである。恐らくこれ程の傷を負わされたのもまた自分を守ろうとした為だ。

申し訳なく思いながら、このような手段を選択した海軍という組織にも、また彼の身に危害を加えることを是認したヤタガラスにも苛立たしさが募る。

最初から自分に直接連絡を取れば良いものを、何故彼を巻き添えにした。

優しい彼が気に病まない筈が無いというのに。

それとも其れも計算の内か。

ゆっくりと其の背を撫でながら口を開く。

「大丈夫ですよ、鳴海さん。．．．俺は、大丈夫です」

必ず、術者を討ち果たし、此処へ戻ってきます。

「貴方の傍に、戻ってきますから」

だから、休んでいてください。

「次に会うときには、俺も元通りになっていますから。．．．ね、」

言霊の力を借りて、不安定になっている彼を落ち着いた着かせる。自分の身を素じて僅かの休息しか取っていないのだらう彼を休ませないと、安心して社へ戻れない。

「．．．判った」

瀟洒をつぎ承した彼は、ゆっくりと腕を解いて身を起した。

「自分が望んだことであるのに離れていくゆめもりを名残惜しく感じながら、それを體程も表に出さず微笑みかける。」

「では、行つて参ります。」

「……、ああ……、氣をつけてな。」

「ゴウト、頼んだぞ。」

足下の黒猫にも忘れず声をかける彼を見ながら字幅の角度を直す。

「いやあ、と返事を返す黒猫と視線を合わせ、再び彼に微笑みかけてから身を翻し社外へ足を踏み出し、階段へと向かいながら足元の目付へと声をかける。」

「行くぞ、ゴウト。……、舐めた真似をしてくれた奴らに、思い知らせてやる。」

「マー（ふん……、氣を抜くなよひまっ）が」

「言われるまでもないぞ。……、わつちと終わらせようね。」

其の言葉を最後に、後は無言で歩を進めた。

「は……」

一人取り残され、先程目にした少年の姿を思い返す。

どんなに気を張ろうとも、先程腕の中に包んだ其の身は大人のものとは異なり未だ成長途中の細さがあり。守ってやらねば、という思いを新たにしてみました。

だが一先ずは、自室で休まねばならないだろう。少年と交わした約定を違えるわけには行かない。自室へと足を向けながら思ったことは矢張り少年のこと。

あんな白蛾のような顔色をして。口にすることといえば自分の心配ばかり。なんて子だ。

俺にはそんなにまでして想ってもらう資格などありはしないのに。

あの時。

海軍の奴らに取り囲まれて、それでもあの子の為に憤りを感じ、抵抗したのは事実ではあるけれども、それだけではなかったのだ。

先程は目を逸らし続けていた感情が、少年の一途な想いをかけられたことで却って其の存在を主張し始めた。

嗚呼、そつだ。自分はお前が思っている程大した人間じゃない。反吐が出る程、醜い人間なのだ。

何故なら、あの時。

自分の胸中を飛来したのは。

ゆるく首を振りそれ以上考えるのを止め、ベッドに潜り込んだ。

殴られるのもいいかもしれない。

殴られたところで何の贖罪にもなりはしないのに、それでもそう思わずにはおれなかった。あのような境遇に於かれてさえ、悲観もせず捨くれもせず。

身勝手な自分の我が侏すら、ただ溜息をついて受け入れて。

口にするのは僅かばかりの説教と、この身を業しる言葉。

あの少年が知るには、其れはあまりにも醜く、身勝手に、自棄に満ちた感情だ。そんなものは光り輝かんばかりに神に愛されている彼には相心しくない。

.....薄汚い自分にはひどくお似合ひのものだけね。